

## 卷 頭 言

鈴木 徳 男

まず歌話をいくつか記してみる。

心なき身にもあはれはしられけり鳴たつ沢の秋の夕暮れ（『新古今集』秋歌上・三六二）  
歌の作者、西行（一一一八―一一九〇）は、陸奥修行中に『千載集』編纂のうわさを聞いて都へ向かうが、途中でこの歌が入集していないと聞いて引き返す。話は『今物語』『井蛙抄』などにみえる真偽のわからない説話だが、歌は自歌合である『御裳濯河歌合』に自選している。『新古今集』に前後してならぶ寂蓮、定家の作とともに後世「三夕の歌」として讃えられ、名歌として人口に膾炙している。

風になびく富士の煙の空に消えてゆくあもしらぬわが思ひかな（『新古今集』雑歌中・一六一五）

慈円（一一五五―一二二五）の家集『拾玉集』に「（この歌は）一三年のほどによみたり。これぞわが第一の自嘆歌と申しし事を思ふなるべし」という西行自身のことばが伝わり、自らみとめた代表歌（自嘆歌）と知られる。西行最晩年の絶唱。

夕されば野辺の秋風身にしみてうつらなくなり深草の里（『千載集』秋上・二五九）

俊成（一一一四―一二〇四）が『千載集』に自選したのみならず『古来風体抄』にも勅撰集抄出歌として自詠から唯一選んだ。また鴨長明（一一五五―一二一六）の歌論書『無名抄』『俊成自讃歌の事』の内容（代表歌へおもて歌）を聞かれた俊成自身がこれこそ「身にとりてはおもて歌とは思ひ給ふる」といってあげた）によって

も、俊成のまさしく自讃歌と知られる。作意について『伊勢物語』百二十三段を本説とすることを『慈鎮和尚御自歌合』の判詞で俊成自身が言明している。若い歌人たちに影響を与え時代を画した秀歌。

さくらさく遠山鳥のしだり尾のながし日もあかぬいろかな（『新古今集』春歌下・九九）

後鳥羽院（一一八〇～一二三九）が、親撰である『新古今集』の第二巻春歌下の巻頭に置いた歌。隠岐配流後に編んだ御集にも自ら選び入れた。また同じく『時代不同歌合』に自分の代表作三首のひとつとした（何度か改選して自作を入れ替えているが、この一首は最後まで残した）。二十代半ばの院が建仁三年（一二〇三）十一月俊成九十賀の屏風歌として詠じ、晩年まで愛した作。

こぬ人をまつほの浦の夕なぎに焼くやもしほの身もこがれつつ（『新勅撰集』恋三・八四九）

建保四年（一二二六）六月の内裏歌合で順徳院と番えられて勝となった定家（一一六二～一二四二）の作で、定家自身が『百番自歌合』に採り『新勅撰集』にも自選した。さらに『百人一首』などに自らの一首として採った。生涯おおよそ四千五百におよぶ詠歌を残している大歌人が自ら選び取った一首。

ここにあげた数首は、みなそれぞれの歌人たちが自讃歌とした古典和歌である。藤原清輔（一一〇八～一一七七）は『袋草紙』において、歌を評価する難しさを述べ、さらに「自作は善悪尤も弁へ難き事なり。上手も然るか。俊頼朝臣、吾が詠歌のうち秀歌と称して和歌三十首ばかりを書き出だし、その中に甘心せざる歌多くこれを入れる。秀歌また多くこれを入れず」云々と言って、自らの作品に対して一定の高い鑑識眼をもって選び取る困難さを指摘している。この記事は源俊頼（一〇五五～一一二九）の時代ころから、「自讃歌」（用例は定家の時代）が意識されたことを示している。なお俊頼の父、経信などにも自分の作に対する自負を伝える説話はあるが、それを選び集める話は見えない。日常において特定のT（時）P（所）O（場所）で実用的に詠まれることの多かった和歌が、徐々に文芸として自立する史的背景があった。そうした文芸化の高まりの中から生まれた意識であ

る。

アナクロニズムということなけれ。古典歌人の営為を追いかけることは無駄なことではない。自讃歌は、伝統をふまえながら自らの芸術を見極め、その確立を自覺するところから認識された。他と峻別した個に向けられた厳しい眼差しであり、真なるものを選択する精神である。混迷する現代の社会や文化にあって、真実の自己を見つめ直す何がしかのヒントになりはしないか。二号めとなる人文科学研究所発行の本年報に対して抱くささやかな私の願いもそこにある。